

日本社会福祉学会の今後に向けて

一般社団法人日本社会福祉学会第2期（通算第23期）会長

白澤 政和

（大阪市立大学大学院）



昨年の10月10日の一般社団法人日本社会福祉学会総会で、第2期（通算第23期）会長にご承認いただきました。日本社会福祉学会は今日まで日本の社会福祉学をリードしてきており、その重責を認識するとともに、会員の皆様のご支援を賜り、その責を果たすことができると、念じています。

その最大の責務は、新しく船出した「一般社団法人」を確実に機能させていくことにあります。「一般社団法人」になることは、学会が1つの人格をもつことにあり、法人として社会に対する貢献が課せられることとなります。これには、社会に対する社会福祉の啓発活動等の推進も重要ですが、学会の最大の使命である個々の会員が社会福祉研究を一層推進し、それが国民の質の高い生活に反映していくことこそが、最大の社会貢献であると考えます。

そのため、学会の目的である会員の学問水準が高まるよう、環境の整備を図ってまいりたいと考えています。具体的には、以下の3点に重点を置いて、会員の研究環境の充実を推進してまいりたいと考えています。

1 社会福祉の施策や実践とのフィードバック体制の確立

社会福祉学においても、学会で明らかになったエビデンスを職能団体や養成団体が共有化し、それをもとに、社会福祉施策が推進され、ソーシャルワーカーの水準やその職場環境が向上することに連動することが求められます。このことは、学会会員の研究の自由を制約するものではありませんが、会員の研究成果と社会福祉の施策や実践とのフィードバック体制の確立を進めてまいりたいと思っています。結果として、介護報酬・診療報酬等に影響を与えていくことや、国や自治体の福祉施策の立案や改正に役立ち、ソーシャルワーカーの待遇の改善にも結びつけていくシステム構築を推進したいと思っています。

2 アジア社会福祉学会の再興に向けて

中国では、中国社会学会の中に社会福祉学分会が昨年できましたが、本学会は韓国との国際学術交流を積極的に進めてきており、今後は日中韓での学術交流を進めていきたいと思っています。将来的には3か国交流を超えて、本来は国際学会を核にし、そこと各国の学会が連携し、社会福祉研究の国際化が進んでいくことが最終的な方向であると考えています。その意味では、まずは10数年前に創設され現在休止状態になっているアジア社会福祉学会の再興を図っていくことを進めてまいりたいと思っています。

また、会員の国際学術交流の機会が少ないことも鑑み、本年7月16日から18日に日本で開催される第21回アジア・オセアニア・ソーシャルワーク会議（APASE）に対して本学会も積極的に協力し、多くの会員が参加し、研究発表する機会にしていきたいと考えています。

3 英文誌の充実による国際学術交流の推進

学会の顔である学会誌については、年4回の刊行にまでこぎ着け、高い社会的評価を得ることができるようになりました。一方、3年に1回の英文誌を刊行してきましたが、国際的に会員の研究成果を海外の研究者にも読んで頂き、研究の交流を深める意味でも、また、個々の会員がグローバルな視点で研究を進める意味でも、英文誌の充実が不可欠であると思っています。会員がグローバルな視点をもって研究を進めていくためには、財源的な課題はあるとしても、積極的に英文誌の充実に取り組んでまいります。

本学会は現在5,300人強の会員を擁する社会福祉学会ですが、少子化の波にさらされるだけでなく、社会福祉系大学・学部・学科の縮小化の影響を受け、今後の超高齢社会を見据えると、本来であれば増えなければならない会員数が減少傾向にあります。そのため、会員数を確保していくためには、本学会を魅力あるものにしていくことが喫緊の課題であります。また会員減少に伴い若手研究者の層が薄くなっていくことが予想されますが、若手研究者の研究を奨励していく仕組み作りが求められています。ここにも力点を置いて、活動を進めていきたいと考えています。

以上のような時代の転換期に会長をお引き受けることになりましたが、2年間の任期を全力で邁進し、新たな展望を切り開いていきたいと思っておりますので、会員の皆様のご指導・ご支援を重ねてお願い申し上げます。



第58回 日本社会福祉学会 秋季大会報告

第58回秋季大会事務局
日本福祉大学 原田 正樹

日本社会福祉学会第58回秋季大会が、2010年9日（名古屋市公会堂／日本福祉大学名古屋キャンパス）・10日（日本福祉大学美浜キャンパス）にて開催されました。大会当日はCOP10（生物多様性条約第10回締約国際会議）の開催日と重なり宿泊先の確保や会場移動、また初日は豪雨のため参加された会員には大変ご不便をおかけしました。そうしたなか多くの会員にお力添えを賜りながら無事に開催できましたことを改めて会員諸氏、関係各位に御礼申し上げます。大会への参加者は1,161名でした。

大会テーマは「持続可能な社会福祉の展望と課題ー経済・環境・福祉の視点から」としました。時代の変革期としてグローバル化と経済危機が同時進行し、貧困・格差・排除等の解決策が迫られている今日の社会保障・社会福祉において、持続性回復への理論枠組みとその仕組みづくりを、経済・環境・福祉の視点から追究していくことを試みたいと考えました。これを踏まえて、当日はノーベル物理学賞受賞者の益川敏英氏（名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長）に「世界の平和と福祉」と題して記念講演をしていただきました。またシンポジウムでは「近未来の社会福祉の枠組みと仕組みー環境・医療・福祉政策とソーシャルワークの好循環を求めてー」をテーマにして、炭谷茂氏（恩賜財団済生会理事長）、二木立氏（日本福祉大学）、白澤政和氏（大阪市立大学大学院）の三人の発題をもとに、武川正吾氏（東京大学大学院）、上野谷加代子氏（同志社大学）のコーディネートにより議論を深めました。

また初日の企画以外にも国際学術シンポジウム（5演題）や特定課題セッションは5分科会（19演題）、自由研究報告は59分科会（285演題）、ポスターセッション（50報告）が報告され、2日間にわたって各会場でも活発な研究協議がなされました。

本大会は学会の法人化後の初の大会であったため、従来の大会運営と次の3点で大きな変更点がありました。1. 学会本部と実行委員会の連携に関すること。2. 会計処理に関すること。3. 大会プログラムに関すること。特に理事会のもとに「大会運営委員会」（杉村宏委員長）が設置され、大会の実行委員会と協働して準備を進めるという仕組みになりました。このことは学会として大会の継続性や質の担保が図られますし、大会実行委員会としても問い合わせや協議の窓口が一本化し、大変機能的な準備運営ができました。開催校の負担軽減と大会の質の向上を目的とした改革の方向性はとても適切であったと思います。

そこで本大会では大会運営委員会と協議しながら質の向上という視点から、次のような新たな試みを取り入れてみました。

1. 自由研究報告のコメンテーターの配置など

従来の司会者体制から、司会者＋コメンテーターを配置し、各分科会の最後に「全体協議」の時間帯を設定しました。初めての試みですので、コメンテーターの方々ははじめ会員の皆様には大変ご負担をかけたました。事務局からの説明や調整不足もあり、当初の目的

が十分に達成されたとは言えませんが、参加者の皆様からはこの方式をしばらく継続した方がよいというご意見を多くいただきました。

またキャンパスの都合で、今回はパワーポイント等の使用ができませんでした。会員には大変ご不便をかけたましたが、例年より配付資料が丁寧になりよかったという声もありました。この点も今後の課題の一つかと思えます。

2. 情報交流会の参加について

若手の会員の参加促進等を意図して、今までの懇親会を「情報交流会」に変更し、参加費も値下げしました。また会場ではテーマ別のテーブルをつくるなどの工夫をしました。結果として参加者は162名と例年より多くの会員に参加していただきました。会場や演出を華美にすることなく、質素でも会員相互の情報交流の場にしていきたいものです。

3. 学生実行委員会の組織化

今大会では、約150名の学生たちを「学生実行委員会」として組織しました。当日だけのアルバイトではなく、学会の歴史や意義などのオリエンテーションも加え、少しでも学生のときから学会に交わる機会にしたいという意図からです。参加した会員の皆さんから声をかけていただいたことが、彼等にとって大きな体験になったようです。

こうした大会運営を通しての反省点も数多くあります。実行委員会からの発行物等に校正ミスが多かったこと。案内にわかりにくい部分があったこと。個別の問い合わせ等への対応に時間がかかってしまったこと等々。会員の皆様にはご迷惑をおかけしましたこと、改めてお詫び申し上げます。こうした反省点も含めて第59回秋季大会の開催校である淑徳大学へ引き継ぎをしていきたいと思えます。

思えば一年前に、第57回大会の法政大学から丁寧な引き継ぎを受け、この大会の本格的な準備がスタートしました。この大会というバトンを次の走者に渡せましたことを安堵しております。

きっと日本社会福祉学会を創設された先輩たちは、様々な思いや期待を込めてこの学会を立ち上げたのだと思います。私たちが大会運営に関わるということは、そうした社会福祉学を構築していくという先輩たちからのバトンを受け継ぎながら、さらに発展させていくという使命をつないでいく一点であると思います。

古川孝順会長が開会式の挨拶のなかで、学会の「持続可能性」について述べられました。そのなかで「学会はお互いに汗して参画する組織、場であると思えます。それがなければ、学会の持続可能性はありません」と、敢えて会員として学会活動への参加のあり方にふれられました。まさに一つの大会は関係者の膨大な時間と汗によって成り立っています。これまでも、そしてこれからも続くであろう社会福祉学会の流れの一角に携わる機会をいただけたことを、実行委員一同感謝しております。ありがとうございました。

一般社団法人日本社会福祉学会 2010 年度臨時社員総会 報告

一般社団法人日本社会福祉学会 2010 年度臨時社員総会は、第 58 回秋季大会期間中の 2010 年 10 月 10 日（日）12 時 20 分から日本福祉大学美浜キャンパスにて開催された。議案は全て承認され、13 時 05 分に解散した。

I. 会長挨拶

一般社団法人日本社会福祉学会古川孝順会長より開会挨拶があった。

II. 開催校挨拶

日本福祉大学加藤幸雄学長から歓迎の挨拶があった。

III. 議事録署名人の選出について

定款第 37 条第 2 項に基づき、議事録署名人として、太田義弘監事と田端光美監事を選出した。

議長（会長）から、定足数 163 名に対して、現在の代議員出席者が 82 名となったので総会を開催し、議事を進行するとの開会宣言があった。

総会終了時点の状況：出席代議員 93 名、委任代議員 38 名。

IV. 議事

第 1 号議案（社）日本社会福祉学会第 2 期（通算第 23 期）役員を選出について

議長から次の説明があった。

- 1) 定款附則第 3 項「この法人の設立当初の役員は、第 18 条第 1 項の規定にかかわらず、設立総会の定めるところによるものとし、その任期は、第 21 条第 1 項にかかわらず、2010 年度の臨時社員総会終結の時までとする。」と規定されており、現役員は、本日をもって任期満了となる。
- 2) そのため「一般社団法人日本社会福祉学会役員候補者選出規則」に基づいて平成 22 年 6 月 5 日に理事候補者及び監事候補者選挙を実施し、理事候補者 14 名と監事候補者 2 名を選出した。
- 3) さらに同年 7 月 11 日に選出された選挙理事候補者による推薦理事候補者選出会議を開催し、推薦理事候補者 6 名が推薦された。
- 4) ついては、定款第 17 条並びに定款第 18 条の規定により本日の臨時社員総会で後任役員の選任について審議して頂きたい。

審議の結果、第 2 期（通算第 23 期）理事 20 名 監事 2 名を満場一致で承認した。

第 2 号議案 任意団体「日本社会福祉学会」からの財産譲渡について

議長から、以下の説明があった。「設立総会（3/27 開催）第 4 号議案で譲渡項目については承認されている。任意団体「日本社会福祉学会」の監査を 6 月 17 日に実施し、具体的な財産額が確認されたので、財産目録を確認して頂きたい。そのため、報告 1「任意団体」時の 2009 年度事業報告・決算・監事報告を先に報告し、審議することとしたい。」

岩崎晋也総務担当理事から「事業報告」、湯澤直美財務担当理事から「決算報告」、太田義弘監事から「監査報告」がそれぞれ行われた。

審議の結果、譲渡財産について満場一致で承認した。

第 3 号議案 名誉会員の推挙について

議長から定款第 6 条「この法人および社会福祉学の発展に特に貢献のあった個人で、理事会よって推薦され、社員総会の議決をもって承認された者」の規定により、2 名の会員を推挙したいとの提案があった。今回の 田端光美会員・太田義弘会員の名誉会員推挙について、7 月 11 日開催の理事会で承認されているとの説明があり、満場一致で 2 名の名誉会員を承認した。

第 4 号議案 なし

V. 報告

1. 任意団体「日本社会福祉学会」2009 年度事業報告・決算について
第 2 号議案で報告済。
2. （社）日本社会福祉学会第 2 期（通算第 23 期）役員候補者の役割分担について
白澤政和新会長からの所信表明後、新役員の紹介と役割分担について、報告があった。
3. 韓国社会福祉学会招聘者について
白澤政和国际学術交流委員会委員長から梁玉京韓国社会福祉学会会長の紹介があり、梁会長から挨拶があった。
4. 第 59 回春季・秋季大会および第 60 回秋季大会について
古川孝順会長から第 59 回春季大会を 5 月 29 日に東洋大学で、秋季大会は淑徳大学で 10 月 8 日・9 日に開催する。第 60 回秋季大会は、関西学院大学で開催するとの報告があった
5. （社）日本社会福祉学会会員の現状について
岩崎晋也総務担当理事から 2010 年 9 月 24 日現在の会員数（5,293 名）の報告があった。
6. その他 なし

VI. 次期開催校挨拶

淑徳大学 長谷川 匡俊学長より開催の挨拶があった。



名誉会員の推挙に寄せて

田端 光美 名誉会員

(本学会役員歴)
18期・19期 理事
21期・22期 監事



日本社会福祉学会法人化後の社会福祉学会臨時社員総会で、名誉会員にご推挙をいただきましたことを光栄に思い、会員皆様のご協力に御礼申し上げます。

と申しても、これまで名誉会員になられた先輩諸先生が学会創設期から並々な情熱を傾けて社会福祉学の確立にご努力され、学問的に多くの優れた業績を残された先生達でいられることを思うと、それに比して自分を顧み、研究者の一人として役割を務めたとはいえ、あまりにも落差が大きく、名誉会員というも面映いというのが偽らざる心境です。

学会創設当時の大会で、学生補助員として学会という場を認識し、間もなく会員となったので、社会福祉学会との関わりは50年余で、今日に至る社会福祉学会の発展とともに歩んできた研究生活でした。第18期理事を受けた時は、全社協の協力で運営されていた学会業務を独立体制にしたばかりの時期で、事務所整備、学会業務の整序がまず先決でしたが、理事会の課題は学会の研究レベルを向上させることでした。大会運営の改善、学会機関誌の査読制、機関誌発行回数増加などに取り組み、学術会議における位置を確立したことは、学会における社会福祉学への認識を新たにす一段階であったと思います。

さて、4期12年間の役員を務めたことにより、名誉会員に推挙されたことに感謝しつつ、今日の社会状況からいけば少し違和感がないとはいえません。推挙の条件に年齢規定があることです。江戸川柳に詠まれた「元日や・・・嬉しくもあり、嬉しくもなし」をもじれば、「名誉会員嬉しくもあり・・・」ということでしょうか。

いや申したいことは会長職として多くの責任を担い学会に貢献された会員は、後期高齢に至るのを待つまでもなく、「名誉会員」に推挙されてなお、ご活躍を期待することが望ましいというのが持論です。

太田 義弘 名誉会員

(本学会役員歴)
17期・18期 理事
21期・22期 監事



まず何よりも名誉会員へと推挙いただき感慨一入である。紙面を借りてご高配に深甚の感謝を申し上げたい。この心境とともに、一方では齢を重ねることが、必ずしも嬉しいことではなく、余生への焦りと重圧を実感している。それは後期高齢者としての自覚に対する問いかけでもある。過去の艱難辛苦や手柄話を語りたがる高齢者の性は、加齢に伴う人生の不条理さに対する慰めや補償なのかもしれない。

そのような駄弁は控えることにして、視野や発想を変えて自らの可能性や限界を知ることから見えてくる新しい世界もあり、物事の深遠な意味について再認識させられることも少なくない。高齢者としての認識に立脚し、過去についての語りはほどほどに、そして未来（未だ来たらず）については後継者に託し、むしろ現実を直視しながら、将来（将来に來たらんとする状況）を見据えた意識と行動で、今しばらくの時を過ごしたいと願っている。

それは、社会福祉の危機と閉塞状況に、われわれの側面から可能な一步を踏み出すことで、ともに教育と研究さらに実践と運営を足元から点検し、微力ながら改善・整備へと始動、フィードバックへのチャレンジを継続することである。社会福祉教育は、利用者のためと称し、国策提供への無定見な走狗者養成に手を貸し、教育産業へと逸脱してきている。その結果、学生にまで敬遠されており、その再生が焦眉の急を要する課題である。

教育の荒廃は、社会福祉研究にも実践にも連動している。ソーシャルワークの固有な役割や機能が摘み食いされ、サービス供給の便法へと拡散することから、ソーシャルワークが霞んできている。ソーシャルワークの原点に回帰し、教育と研究さらに実践を、高度専門職として再生させたいものである。それは大学院教育を中心にしたシフト転換を意味しており、その将来への動向を見届け安心して旅立ちたいと願っている。

2010年 一般社団法人日本社会福祉学会学会賞 受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2010年の学会賞が決定し、第58回秋季大会期間中の2010年10月10日に日本福祉大学美浜キャンパスの文化ホールで授賞式が行われました。

2010年の学術賞は「該当者なし」となりましたが、奨励賞として、単著書部門から永田千鶴会員（熊本大学准教授）の『グループホームにおける認知症高齢者ケアと質の探究』（ミネルヴァ書房）と、村田文世会員（九州看護福祉大学講師）の『福祉多元化における障害当事者組織と“委託関係”－自律性維持のための戦略的組織行動－』（ミネルヴァ書房）、論文部門から石川時子会員（首都大学東京大学院生）の「能力としての自律－社会福祉における自律概念とその尊重の再検討－」（社会福祉学50巻2号）と堅田香緒里会員（埼玉県立大学助教）の「ベーシック・インカムとフェミニスト・シティズンシップ－脱商品化・脱家族化の観点から－」（社会福祉学50巻3号）がそれぞれ選出されました。

◆ 奨励賞・単著書部門

永田 千鶴



この度は、歴史ある日本社会福祉学会の学会賞・奨励賞をいただき、大変感激しております。推薦したくださった先生をはじめ、審査委員の先生方、そして日本社会福祉学会の皆様方に心よりお礼申し上げます。

受賞しました『グループホームにおける認知症高齢者ケアと質の探究』は、「ケアの質とは何か」を考えることから始まりました。ケアの質については、先行研究により、「構造」「過程」「結果」の三つの側面から説明されることが一般的ですが、その評価については、当初の「構造」評価から、現在では「結果」評価に関心が集まっております。私は結果としての実績のみに関心がもたれる現場での臨床経験を踏まえ、「プロセスなくしてなぜ結果を語れるのか」と心を砕き、何とかケアの「過程（プロセス）」を目に見える形にしたいと考え、約十年間追究してきたものを本にいたしました。

具体的には、認知症高齢者を対象としたケアプロセスの質を、参与観察による質的データから、客観的に評価できる指標を作ろうと試みましたが、認知症高齢者には、特に個別的なケアが求められますので、普遍化した指標にしようとするすと、その個別性が削がれてしまいます。そのため、極力具体的なケアの内容、コミュニケーションの際

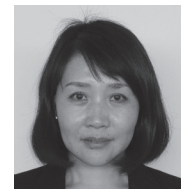
の言葉のかけ方を文章で示し、100項目のガイドラインとして表しました。膨大な時間とエネルギーを費やして、地道に質的分析を行ったわけですが、私にとっては至福の時間でした。また、このガイドラインの妥当性を検証するために量的調査を試みた際には、グループホームの職員から、「100項目ですか。忙しいのです。」と電話で断られそうになるのを、ぜひ一度見てください、とおしかけしてもらいました。そうしたら、「なるほど。こういうことは大事ですよ。」と、私が住む熊本市に当時開設していた全てのグループホームの協力を得ることができました。そして、統計分析により、ガイドラインの妥当性を確認できた時には、苦しいことが多い研究において、初めて喜びを感じることができた、と言いましても過言ではありません。

そのほか、研究の過程では、様々な困難にぶつかりましたが、忙しく働く現場の皆様にも幾度となく励まされましたし、何と言いましても忍博次先生には、「このような研究は大切です」と初対面の私の指導をお引き受けくださったことをはじめとし、丁寧にご指導いただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

私の座右の銘は「志あるところに道はある」です。研究者としては、遅々とした歩みではありますが、今後も現場での素晴らしい実践をできるだけ多くの人に伝えることができるように、志をもって研究に臨んでいきたいと思っております。

◆ 奨励賞・単著書部門

村田 文世



この度は、栄誉ある日本社会福祉学会奨励賞を賜り大変光栄に存じます。拙著『福祉多元化における障害当事者組織と“委託関係”』は、2007年日本女子大学に提出した博士論文に加筆修正を行なったものですが、ご審査頂いた先生方を始め、今日までご指導頂いた先生方、また、事例研究先の皆様に改めて感謝の意を申し上げます。

近年、福祉多元化に伴う民間非営利組織への事業委託の加速は、組織本来の自律性喪失という新たな課題を生みだしています。政府資金が組織に及ぼす影響については、先行する欧米においても十分な実証的研究が行なわれてきたとはいえ、ましてや日本においては、介護保険導入以降、公共政策学などを中心によく議論の萌芽がみられる現状にあります。本研究は、こうした問題に対して、日本の自立生活運動を牽引してきた障害当事者組織に焦点を当て、当事者主体という組織アイデンティティを維持するための組織行動について、組織理論の観点から事例分析を行なったものです。導出した自律性維持のための戦略的マネジメントやそれに伴う組織の変容は、自律性問題



を、制度的側面から捉えて対等関係のための条例制定や協働契約の導入などを求める議論の限界を示唆し、実施過程における組織内部・外部のダイナミズムの視点から捉えることの重要性を示すものとなりました。また、委託関係を、実施レベルの二者間にとどまらず、政策レベルにおける政府と民間非営利組織総体というセクター間で捉え直す必要性を提示するに至りました。

緊縮財政を背景にした今日の公私協働は、供給レベルの議論に終始し、市民参加や社会変革による民主主義の実現を捨象してしまう危うさを孕んでいます。新しい社会福祉の実現や福祉コミュニティの形成に向けては、政策形成過程までも視野に入れた「住民主体（当事者性）と運動」に担保された真の公私協働が鍵になると思われます。ここに社会福祉学が自律性問題に着目する意義があるのではないのでしょうか。この度の受賞を励みとして、今後一層、問題の究明に努力して参りたいと思います。

◆ 奨励賞・論文部門

石川 時子



この度名誉ある賞を受賞できましたことを大変嬉しく思いますとともに、審査の労をお取り下さいました先生方、御指導下さいました先生方に深く感謝申し上げます。

本研究は、私がかつて精神障害を持つ方の御相談を受ける中で、彼らの自己決定とは何か、と考えたことが研究の源泉となっております。例えば、お金の相談に来られた方に、相談の中で障害年金の取得を勧めることがあります。しかし、お金は必要であるけれど、それと引き換えに障害者であるということ突き付けられ、ぼんやりとはあった一般就労の希望を諦めたり、作業所へ行くべきなのか悩んだり、至極複雑な葛藤の上に年金や作業所を選択されることがあります。しかしそれが一括りに「自己決定」と言ってしまうてよいのか、障害を突き付けることが自律の尊重になるのか、と私自身に「自律・自己決定とは何か」という難題をもたらしました。研究の中で、社会福祉における自律とは、実はそれほど明らかでないのにも関わらず、方法論上の自律の尊重が唱えられていることに疑問を持ち、自律概念そのものを検討する必要性を感じました。その結果、相談者の自己決定に至る過程には、選好形成上の葛藤や、社会から要求される合理性、決定を表出する能力など、いくつかの能力が自律・自己決定能力と呼ばれていることを論文上で述べました。決定に至るまでの葛藤や社会との関わりの中での苦渋の選択に対して、どのように支援を検討すべきなのか、基本的な方向性を述べています。

抽象化した議論のため、ともすると机上の空論

に終始しがちですが、この議論は相談を受ける中で発生したものであり、自己決定の尊重に悩まれるソーシャルワーカーの方々に、自己決定とは重層的であるということを示すことによって、少しでも援助上の困難を解くことに寄与できればと願っております。今後も援助の困難に向き合い、貢献できるよう研究を続ける所存でございますので、御指導御鞭撻の程を宜しくお願い申し上げます。

◆ 奨励賞・論文部門

堅田 香緒里



私は、学生時代に行っていた路上生活者支援活動の経験をきっかけに、貧困や対貧困政策をめぐる研究を進めてまいりました。その過程で、貧者をめぐる多くの政策の中に選別一援助に値する貧民／値しない貧民—の眼差しが息づいているということ、そしてそれが、貧者の分断統治に深く関わっているということに違和を覚えていました。そこで、ベーシックインカム（以下、BI）であれば、選別を伴わない基本的な生活保障が可能なのではないかという希望を持ったのですが、一方でBIをめぐる議論を眺めると、それがひどくジェンダーに無自覚であることに不満を覚えました。

そこで拙稿では、両者のBIとフェミニズムの「交差」のための足がかりとして、フェミニズムのシティズンシップ論に依拠し、脱商品化／脱家族化の観点からBIの—とりわけ女にとっての—含意を考察しました。その結果、およそ三つの立場に類型化できる従来のフェミニストシティズンシップ・モデルは、いずれも脱商品化・脱家族化を同時には志向しえないこと、それに対し、BIのシティズンシップ・モデルであれば両者の二律背反を解消し、これを同時に志向しうることを明らかにしました。このようなやや抽象的な議論を実践可能な形に展開していく作業は重要な課題として残ってはおりますが、拙稿での成果が、ささやかながら今後のフェミニスト政策構想を考える際の一助になればと願っております。

最後になりましたが、この度は、拙稿に奨励賞を授けていただき誠にありがとうございました。日頃私は、社会福祉の中心となる研究を横目に、周辺のことを好んで研究してまいりました。その結果を認めていただいたことは、個人的にも大変励みになりましたが、なによりもこれまでご指導くださった先生方、そしていつも私の厄介な「問い」とそれをめぐる思考に付き合ってくれる、かけがえのない研究仲間や友人の力の賜物と心から感謝しております。いただいた賞の重さに恥じないよう、気を引き締め直して今後も研究に精進してまいりたいと思います。

一般社団法人日本社会福祉学会
2010年度 第3回～第4回 理事会報告

第3回：2010年10月8日
日本福祉大学 名古屋キャンパス
第4回：2010年10月9日
名古屋市公会堂（大会期間中）

第3回理事会

【会長挨拶】

本日は今期最後の理事会である。次期役員もオブザーバーで出席いただいている。

【出席理事の確認と議事録確認】

出席理事を確認し、本日の理事会が成立したとの宣言を行い、議事録の確認・署名者は、太田監事・田端監事と古川会長とすることを確認した。

【議案事項】

第1号議案：(社)日本社会福祉学会第2期(通算第23期)役員について

会長から第2期(通算第23期)役員選出経過報告と、白澤政和推薦理事選考会議議長から推薦理事選考経過報告があり、理事20名・監事2名を承認した。併せて10月10日開催の「臨時社員総会」に諮ることも確認した。

第2号議案：(社)日本社会福祉学会「地域部会委員会規則」制定について

各地域ブロックから提出された「地域部会委員会規則」を承認し、次の事項についても確認された。
①この規則の施行年月日は、理事会開催日となる。従って、既に各地域において承認されていれば、本日(10月8日)が施行日となる。まだ、承認を得ていない地域の規則は、これから開催される理事会開催日となる。
②各地域部会委員会の委員は、理事会承認事項に該当するので、次回理事会までに提出していただきたい。

第3号議案：(社)日本社会福祉学会「名誉会員推挙手続き」について

前回理事会で承認された推挙の手続きを「覚書」にしたことについて提案し承認した。

第4号議案：(社)日本社会福祉学会「研究倫理委員会規程」の一部改正について

研究倫理委員会規程第4条第2項で「委員の任期は2年とし、再任を認めない。」と規定されていることについて、委員が再任できるように条文を改正することを承認した。施行月日は2010年10月8日。

第5号議案：2010年度学会賞授与者について

以下の授賞者(奨励賞4名)を承認した。
単著書部門：永田千鶴会員、村田文世会員
論文部門：石川時子会員、堅田香緒里会員

第6号議案：(社)日本社会福祉学会「学会賞事業要綱」の一部改正について

「学会賞要綱4審査の対象」の条文を2010年10月8日付で改正し、要綱の施行年月日を2011年1月1日とすることを承認した。

第7号議案：第59回春季・秋季大会テーマについて

次期理事会への申し送り事項とすることを確認した。

第8号議案：第60回秋季大会開催校について

関西学院大学で開催することを承認した。

第9号議案：日韓学術交流覚書更新について

相互の受け入れ態勢の具体化について韓国側と合意し、10月10日に調印することを承認した。

第10号議案：会員入会審査について

23名の入会申込者を承認した。

第11号議案：その他

「臨時社員総会」の議案・報告事項を確認し、議事録署名人を太田監事・田端監事および古川会長とすることを確認した。

【報告事項】

1. 学会ホームページ委託業者を㈱リプラスに決定した。
2. 機関誌『社会福祉学』に「文献紹介欄」を新設する。
3. 第58回秋季大会実行委員長から大会の準備状況について報告。
4. 出版企画「シリーズ『社会福祉学の論点』(仮称)」の出版契約を中央法規出版㈱と締結した。
5. 第6回日本社会福祉学会フォーラムの企画報告。
6. 学会連合シンポジウムのシンポジストを次回理事会で選考する。

第4回理事会

出席状況を確認し、議事録の確認・署名者は、太田監事・田端監事と古川会長とすることを確認した。

1名の入会申込者の審査を行い、承認した。

2010年度第3～4回理事会 出席状況

役員名	氏名	3回	4回
会長	古川 孝 順	○	○
副会長(国内担当)	高 橋 重 宏	○	○
副会長(国外担当)	白 澤 政 和	○	欠
総務担当理事	岩 崎 晋 也	○	欠
庶務担当理事	湯 澤 直 美	○	○
研究担当理事	杉 村 宏	○	○
研究担当理事	小 林 良 二	○	欠
研究担当理事	坂 田 周 一	欠	欠
研究担当理事	野 口 定 久	○	欠
渉外担当理事	足 立 叡	○	○
渉外担当理事	市 川 一 宏	欠	○
機関誌担当理事	山 縣 文 治	○	欠
機関誌担当理事	芝 野 松 次 郎	○	欠
北海道部会担当理事	杉 岡 直 人	欠	○
東北部会担当理事	都 築 光 一	○	○
関東部会担当理事	森 田 明 美	○	○
中部部会担当理事	杉 本 貴 代 栄	○	○
関西部会担当理事	山 辺 朗 子	○	○
中四国部会担当理事	岡 崎 仁 史	○	○
九州部会担当理事	田 畑 洋 一	欠	欠
監 事	太 田 義 弘	○	○
監 事	田 端 光 美	○	○



一般社団法人日本社会福祉学会
2010年度 第5回~第6回 理事会報告

第5回：2010年10月10日
日本福祉大学 名古屋キャンパス
第6回：2010年12月23日
四谷福祉会議室

第5回理事会

【議案事項】

第1号議案：会長の選出について

定款第18条第2項、定款第39条第5号の規定により、新会長に白澤政和理事を選出し、白澤新会長から所信表明があった。

第2号議案：役員の業務分担について

副会長に黒木保博理事と野口定久理事、総務担当理事に金子光一理事、財務担当理事に岩間伸之理事、研究担当理事に岩崎晋也理事の就任を承認し、各理事の業務担当についても承認した。

第3号議案：各種委員会委員構成について

各委員会の構成委員を承認した。広報委員については次回理事会の審議事項とし、フォーラム企画委員会については、研究委員会で検討するため委員会設置は保留となった。

第6回理事会

【会長挨拶】

本日は、役員任期期間中の事業をどのように実行、実施していくかを議論したい。

【出席者の確認及び議事録確認】

出席理事を確認し、理事会が成立していることを確認。議事録署名人として、小林監事が欠席のため、白澤会長と杉村監事が署名することを確認した。

【議案事項】（審議順を変更）

第2号議案「第59回春季・秋季大会テーマについて」

大会運営委員会及び淑徳大学から報告があり、テーマ、開催月日、開催場所を承認した。

○第59回春季大会テーマ：「いま社会福祉原論に求められていること」

開催月日：2011年5月29日（日）

開催場所：東洋大学 白山キャンパス

○第59回秋季大会テーマ：「ソーシャルワークの本質を考えるー原理的な問いと実践力を創り出すものー」

開催月日：2011年10月8日（土）～9日（日）

開催場所：淑徳大学千葉キャンパス

第3号議案「今後の全国大会運営について」

大会コスト削減の改善策と第59回秋季大会参加費について審議し、下記の事項を承認した。①秋季大会コスト削減のため、開催案内はモノクロ印刷し、全会員へ郵送する。開催プログラム・抄録

は、WEB上で公開する（印刷物希望会員へは実費で頒布）。大会当日は、プログラム、抄録、会場案内、シンポジウム資料を印刷物で用意し、閲覧できるようにする。韓国招聘者には印刷物を渡す。②第59回秋季大会参加費については、上記を改善した場合、約200万円を削減できると予測。その分、学部生・大学院生の大会参加費を値下げする。

第1号議案「第2期（通算第23期）事業方針について」

会長の事業方針を具体化するため、各委員会または担当理事は事業計画を立案することを承認した。

第4号議案「フォーラムのあり方について」

今期のフォーラムの進め方について、下記の点を承認した。①研究委員会が学会として積極的な発信となるよう方向性・テーマを企画立案する。②実施に当たっては、研究委員会のもとに開催予定の地域ブロックの若手研修者を中心とした「企画委員会」を設置する。③年2回開催する。来年7月「九州地域」でテーマ「家族とケア」（仮題）で山辺研究担当理事が担当する。

第5号議案 各種委員会委員について

学会賞審査委員の1名補充、広報委員会委員、学会連合運営委員について承認した。

第6号議案 各地域部会規則および「役員」の承認について

東北・関東ブロック・中国四国・九州の各ブロックの規則・役員を承認した。施行年月日は、2010年12月23日。未選出のブロックは次回理事会にて審議する。

第7号議案 会員入会審査について

11名の入会申込者を承認。

【報告事項】

- 2010年度上半期予算執行状況について
財務担当理事より報告。会費未納者の取扱について意見が出された。
- 第58回秋季大会の野口実行委員長から報告。
- 第59回秋季大会「特定課題セッション」コーディネーターを募集し、8名を選考したことを報告。
- 第4回フォーラムを「なくそう 子どもの貧困」をテーマに広島市で開催する予定。
- 野口国際学術交流促進委員長から、①2011年4月22日・23日開催の韓国社会福祉学会春季大会のメインテーマ並びにシンポジウムおよび自由研究発表募集について、②韓国・中国および欧米との学術交流について報告があった。
- 第21回アジア太平洋ソーシャルワーク会議発表演題募集についての報告。

7 各種委員会報告

- 湯澤広報委員長から○ホームページリニューアルの検討状況、○学会ニュース No56号・メールマガジン第5号発行について報告。
- 加藤研究倫理委員長から○倫理指針は、現行の指針を維持する。○機関誌編集委員会と協力して投稿・査読・発表等のルールに適合した倫理指針のリニューアルを行う。○研究倫理向上のための学習環境を設定する。○懲罰については特に設けない、との報告があった。



2010年度第5～6回理事会 出席状況

新入会員 35名 (2010年度第3回・第4回・第6回理事会承認)
50音順

役員名	氏名	5回	6回
会長	白澤 政和	○	○
副会長	黒木 保博	○	○
副会長	野口 定久	○	○
総務担当理事	金子 光一	○	○
財務担当理事	岩間 伸之	○	○
研究担当理事	岩崎 晋也	○	○
研究担当理事	上野谷 加代子	○	○
研究担当理事	牧里 每治	○	○
研究担当理事	岡部 卓	○	○
機関誌担当理事	河合 克義	○	欠
研究倫理担当理事	加藤 幸雄	○	○
広報担当理事	湯澤 直美	○	○
広報担当理事	市川 一宏	○	○
北海道ブロック担当理事	杉岡 直人	○	○
東北ブロック担当理事	都築 光一	○	○
関東ブロック担当理事	大島 巖	○	○
中部ブロック担当理事	安井 理夫	○	○
関西ブロック担当理事	山辺 朗子	○	○
中四国ブロック担当理事	岡崎 仁史	○	○
九州ブロック担当理事	門田 光司	○	○
監事	杉村 宏	○	○
監事	小林 良二	○	欠

安藤 好枝	中部大学
李 京林	
稲垣 久和	東京基督教大学
稲富あゆみ	長崎純心大学
呉 世雄	法政大学
大川 新人	明治学院大学
大生 定義	立教大学
上鹿渡和宏	京都府立大学
北村 智洋	瑞穂町社会福祉協議会
小西 淳子	岡山市役所
酒田 和久	東洋大学大学院
桜井 昭男	淑徳大学
島田 久幸	新潟大学大学院
杉山 千暁	社会福祉法人 翼福祉会
関根 麻美	田園調布学園大学
関屋 光泰	日本福祉教育専門学校
曾 永宏	日本大学
園田 和江	鹿児島国際大学大学院
高橋 利幸	富田浜老人保健施設
中塘 三生	関西学院大学
中村 匡寛	西九州大学大学院
野口 史緒	岐阜大学大学院
島山 充	(社福) 川井心生活会
林 貴子	名古屋医療秘書福祉専門学校
福原 宏幸	大阪市立大学大学院
牧野恵理子	早稲田大学大学院
松田ひとみ	筑波大学大学院
神子上 暁	特別養護老人ホーム 春菊苑
向井 智之	淑徳大学
森永 佳江	久留米大学
山口 佳子	帝京平成大学
吉江 悟	東京大学大学院
吉田 綾子	
鷺野 明美	中央大学大学院
渡邊 圭	東北福祉大学大学院

・・・日韓学術交流委員会 報告・・・

一般社団法人日本社会福祉学会副会長／国際学術交流委員会委員長
野口 定久 (日本福祉大学)

日本社会福祉学会第58回秋季大会において日韓国際学術シンポジウム(2010年10月10日、日本福祉大学美浜キャンパス)は、「福祉サービスのデリバリーシステムとソーシャルワーカー-高齢者ケアサービスの運営と評価システムの国際比較研究」をテーマにして、日本・韓国・台湾の研究者6名による報告がなされた。本テーマは、2008年度から3年間にわたって「サービス・デリバリーシステムとソーシャルワーク」に関する両国間の研究交流の成果を生みながら、一応の収束をみた。

同日、日韓学術交流委員会が開かれ、次の諸点について協議がなされた。①「日本・韓国における研究交流の推進に関する覚書」が韓国社会福祉学会梁玉京会長と日本社会福祉学会白澤政和会長の調印に基づいて締結された(有効期限は、調印の日より2年間)。②2011年韓国社会福祉学会日韓シンポジウム及び自由研究発表一開催日時:2011年4月22日、23日、開催場所:忠清北道 清原郡 五松団地 韓国福祉人力開発院、シンポジウムのテーマ:東アジアの文化的多様性と社会福祉実践(仮題)、③昨年7月ハルピンにおいて開かれた中国社会福祉専門委員会に、当時の古川会長、白澤副会長、沈潔会員、野口が出席した。また、韓国社会福祉学会にも呼び掛けて韓国側も出席し、3カ国の社会福祉学会の研究交流を促進することで合意をみた。それを受けて日韓社会福祉学会は共同して中国社会福祉専門委員会との交流を促進することを確認した。④韓国側よりこれまでの日韓学術交流の成果を踏まえ、これからの「アジア社会福祉叢書」の出版に関わる提案があった。

以上をもとに、国際学術交流促進委員会は、当面、①の「覚書」に沿いながら、②及び③の協議事項を着実に前進させていく考えである。会員皆様のご理解とご協力をお願いする次第である。

韓国社会福祉学会 2011 年春季大会 自由研究発表者募集のご案内 (国際学術交流促進委員会から)

- 1 発表日時：2011 年 4 月 23 日 (土) 9:30～12:00
- 2 発表会場：忠清北道 清原郡 五松団地 韓国福祉
人力開発院
- 3 募集発表数：7 報以内 (但し、参加者は、1 報
2 名まで参加可)
- 4 原稿作成：要旨原稿は日本語および韓国語で作
成 各 A 4 1 枚 (1600 字)。完成原
稿は韓国語で A 4 10 枚以内
- 5 原稿締切：研究発表要旨 (日本語および韓国語)
と完成原稿を学会事務局宛に、メー
ル (添付ファイル) にて 2011 年 2 月
12 日 (土) 必着で送付のこと
- 6 備考：○通訳は各自で手配すること *手配でき
ない場合は、韓国側で対応 (有料)
○大会参加費は無料
○ホテル・交通費・滞在費は自己負担

第 59 回秋季大会 特定課題セッション 発表者募集のご案内

淑徳大学で開催される第 59 回秋季大会の特定課題セッションの応募要領が発表されました。特定課題セッションの各テーマとコーディネーター、テーマの趣旨が学会ホームページに公表されていますので、関心のある方はご覧ください。研究発表のお申込みは、秋季大会の自由研究発表 (口頭) への応募と同様の形式でお申し込みください。(締切は 6 月 13 日予定)。

事務局連絡

●学会ホームページのリニューアル化について

一般社団法人になって、法人としての社会的役割を果たすため、一層の情報発信力が求められています。このため、会員及び一般市民の方にとって、わかりやすく、利用しやすいホームページに刷新していくため、現在、広報委員会を中心に、ホームページのリニューアルに向けた取り組みを行っています。年度内のオープンを目指していますので、ご期待ください。

ホームページに関するご意見・ご要望がありま

したら、学会事務局までご連絡いただきますようお願いいたします。

●会費未納の方へ

先日、会費が未納となっている会員の方へ再請求をさせていただきました。今年度分も含め 3 年間会費未納の方及び今年度新規入会された方で、入会金・会費が未納の方は、未納のままですと 2011 年 3 月末で退会となりますので、至急お支払いいただきますようお願いいたします。

編集後記

昨年 10 月、一般社団法人となって初めての秋季大会が開催されました。大会の質的向上をめざし、大会運営委員会という新しい組織のもとで運営・企画内容につき議論を積み重ねてきました。理事会の折々には、田端先生・太田先生をはじめ創設当初の学会や大会を担ってきた先生方からその経緯をお聞きする機会に恵まれ、歴史的な蓄積のなかで現在の研究基盤を与えられていることに感謝の気持ちを強くしております。

私の身近なこととなりますが、昨年 10 月 1 日、尾崎新先生が逝去なさいました。思いもしなかった事態に愕然としながら、はや 4 ヶ月が経ちます。その時間は、尾崎新先生が蓄積されてきた研究・教育の真髄に想いを巡らせるときともなりました。授業・実習を通じた学生教育に常に全力投球なさってきた先生には、常に教育と研究を架橋するまなざしが、厳しさと柔軟さと創造力をもって一貫していたと感じさせられます。教育の深まりは研究の深まりに連動し、研究の深まりは教育の深まりに連動する一だからこそ、教育も研究も大事になさってきたのだと受け止めております。先生が学生に送っていた言葉のひとつを最後にご紹介します。「人として譲ってはいけないことに毅然と立ち向って生きて下さい」 (湯澤直美)

発行人 白澤 政和 **学会ニュース 56 号**

編集人 湯澤 直美

発行日 2011 年 2 月 1 日

発行 一般社団法人 日本社会福祉学会
〒160-0008 東京都新宿区三栄町 8
森山ビル西館 303

TEL. 03-3356-7824 FAX. 03-3356-7820

Email jsssw@jt2.so-net.ne.jp

URL <http://www.soc.nii.ac.jp/jssw/>

年会費振替 (振込) 口座 (日本社会福祉学会)

・郵便口座 00150-5-59882

・銀行口座 みずほ銀行四谷支店 / 普 / 1859336

(1 月 25 日現在会員数 5, 313 人)